

# ハリー・ウラタの採集ノート： 朝倉カツエ・藤間美佐が語る〈ホレホレ節〉

中 原 ゆかり

## 0. はじめに

ハワイハワイと 夢見て来たが 流す涙も 黍の肥え

〈ホレホレ節〉は、19世紀末にハワイに渡った日系一世たちが、砂糖耕地の労働の折にうたった仕事歌である。「ホレホレ」とはハワイ語で砂糖黍の枯葉を手でしごきとる作業のことをさし、ホレホレの作業の時に多くうたわれたことからこの呼称がある。その歌詞は相当に多く、仕事の辛さや故郷への思い、セクシャルな歌詞など内容も豊富で、当時の一世の生活感情を反映している。移民史には移民初期の一世たちの過酷な生活を物語る資料として、必ず掲載されてきた。

〈ホレホレ節〉は二世へと継承されることはなく、第二次世界大戦後には消えていった。しかし帰米二世のハリー・ウラタ（Harry Minoru Urata 浦田実）が、1960年代から1970年代にかけて高齢となった一世たち30名程を訪ね、〈ホレホレ節〉を録音した。一世たちの〈ホレホレ節〉は口頭で伝承されてきたため旋律の違いが著しかったが、ウラタは多くの一世代から録音した〈ホレホレ節〉をもとに旋律を標準化して1981年に著作権を獲得した。そして自らの営む音楽教室で教え、CDを制作し、日系のイベントでうたう等して普及に努めた。今日、ハワイアンや日本民謡、講談等でとりあげられるようになった〈ホレホレ節〉は、ウラタが標準化した旋律の影響のもとにある。

本稿では、ウラタが一世たちを訪ねて〈ホレホレ節〉を録音した時の、採集ノートに注目する。ウラタは、一世たちの〈ホレホレ節〉のみならず、耕地で

の仕事の状況等についてのインタビューも録音した。そして自らその録音テープを聞きなおし、採集ノートに書きとどめている。

ウラタの採集ノートは、2つの意味で重要である。第1には、耕地で仕事をしてくホレホレ節をうたってきた一世たち自らの発言を記録している点である。〈ホレホレ節〉についての歌詞の記述や解説は、村崎（1920）、木原（1935）、相賀（1953）、川添（1960,1968）等の知識人により記されてきた。しかしこれらは耕地で働いたことのない彼らの目でもみた〈ホレホレ節〉の解説であり、実際耕地で働き〈ホレホレ節〉をうたった一世たちの発言そのものは記されていないのである。また第2には、ウラタの採集ノートは、ウラタが旋律を統一化して著作権をとるに至るまでの過程の一部である点である。ウラタは、多くの一世たちの話を聞き歌を録音した結果、実際耕地でホレホレの作業をした女性で歌の上手な朝倉カツエと藤間美佐の2人に絞り、2人のうたった〈ホレホレ節〉を参考にして、旋律の標準化をおこなった（浦田：1981）。

本稿では、ウラタの採集ノートの中から、朝倉カツエと藤間美佐に関する部分を紹介したい。朝倉カツエに関しては2度インタビューしており、1度めは1965年、ハワイ島に住む彼女をウラタ自身が訪ね、2度めは1982年に朝倉が所用でホノルルに来た時にウラタのスタジオでインタビューしたものである。また藤間美佐に関しては、録音年は記されていないが、ハワイ島ヒロのラジオ日本語放送のアナウンサーが、ウラタの依頼により藤間のもとに出向いて録音し、テープをウラタに送ったものである。

朝倉カツエと藤間美佐に関してはウラタが折にふれてエッセイ等で名前を出し、また1984年にはホレホレ節を特集したテレビ番組（Hawaii Public T.V.,"HOLE HOLE BUSHI",May 21）でも紹介されている。そのため本稿でも、そのまま実名を使用したい。なお、ウラタのノートそのものは手書きで縦書きに記されているが本稿では横書きに改めた。そのためウラタのノートの漢数字は、本稿では全て算用数字となっている。漢字等の表記については、例えば「歌」と「唄」等、不統一がみられるが、ウラタの表記にそのまま従った。最後に筆者は2005年2月にウラタから採集ノートのコピーを渡され、日本での公開を依頼されたことをつけ加えたい。

## 1. 朝倉カツエ（1965年録音当時64歳）

### （ワイナク耕地プランテーションハウスー朝倉宅にて録音）

浦田「ではここで朝倉カツエさんにホレホレ節を唄っていただきます。朝倉さんはお年おいくつですか？」

朝倉「アハー 64才です」

浦田「ご出身地はアージャパンの？」

朝倉「熊本です」

浦田「熊本ですかアハー、でーホレホレ節ですね」

朝倉「ハイ」

浦田「あの一、どうゆう時にいくつ位の時によく唄っておられたんですか？」

朝倉「そうですね まあここへ着立ちですよ、みんなの方と一緒にホレホレに行ったらあの人達の唄はれるのを聞いておぼえたんですよ」

浦田「実際にこうーホレホレをしながらあの一」

朝倉「ハイもうすぐ行きましたから」

浦田「アーそうですか」

朝倉「ハイ」

浦田「その頃はまだ若かったですね」

朝倉「ハイ」

浦田「どれ位やったんですか。そのキビ畑の仕事？」

朝倉「会社の土地ですから広いんですよ」

浦田「いやどれ位の期間ですねあの一 How many yearsやられたんですか？」

朝倉「そうですね、あれは一そんな時は子供が出来たらやめるんでしょう」

浦田「ハーハーハー」

朝倉「そしたらまた大きくなったら行くんでしょう。だから時々ですよ」

浦田「時々エーデーホレホレっていう意味なんですけどね、どういう意味なんですか。これはあのカナカ語ですか？」

朝倉「ハイ、カナカ語です」

浦田「どういう意味なんですか？」

朝倉「あれはあの、キビに枯れ葉が出来るんでしょう。あの枯れ葉をむしりとしていくのをホレホレって云います」

浦田「まあそのまま立っていますね、あのキビが一そしてその枯れた葉だけをむしり取るんですね。」

朝倉「むしりとしてむねに入れていくんです」

浦田「ホーそれをホレホレというんですね」

朝倉「ハイ」

浦田「大体朝何時頃から仕事していましたか？」

朝倉「朝はうちを6時の鐘と一緒に出ていましたよ」

浦田「鐘鳴らしていたんですか」

朝倉「ハイ鐘が朝6時に鳴るんですよ。そしたらみんなが一緒につれ立って出てゆくんですよ」

浦田「でー6時から何時までですか？」

朝倉「4時までです。昼からの4時までです」

浦田「そして土曜日なんかは？」

朝倉「土曜日は昼までです」

浦田「昼まで… サンデーはお休みですか？」

朝倉「ハイ、そうです」

浦田「そしてあの外の人種も一緒に仕事していましたか？それとも別々ですか？」

朝倉「さー組次第では一緒に働いておられる人たちもありますが、私等は日本人ばかりの女だけの組でした」

浦田「ほーなにかこう引っぱりメンとかいってリーダーの方がこうホレホレ節を唄いながらみんなを引っ張ってそしてみんな働かしたというようなことを聞きましたがそういうことはありましたか？」

朝倉「まあ、そういうことはないんですがまあみんなが気を揃えてそれで私等みたいな一寸なんですかニューメン云いますね。まあついて来いついて

来い、いうてこやわらかに連れて行って貰いました」

浦田「ハアーそうですか、ずい分つらかったでしょう？」

朝倉「ハアーもう着立ちのつらかったのは、もう忘れません。はい、きび畑の横に行って泣いたこともあります」

浦田「そうゆう時まあ歌った唄、そうゆう歌ありますか？」

朝倉「いやまあ一思うて唄った歌もあります」

浦田「どうゆう歌がありますか、その時のー」

朝倉「そうよねえ、まあハワイハワイってええところと思うて夢みて来たんですよ。だがまああんんどキビは竹で涙を流したかしの歌ですよ」

浦田「それを一つ先にお願ひします。その時の実感をこめて一つその時のつらかったことね。そうゆう時に唄った歌を一つお願ひします」

朝倉

〽️ハワイハワイとヨー 夢みて来たが 流す涙も キビの中

浦田「外にどうゆうようなあの歌の文句のホレホレ節がございますか？」

朝倉「そうよねー」

浦田「歌って下さい」

朝倉「ハイそれではー

〽️今日のホレホレヨー つらくはないよー タベ届いた故郷だより

浦田「外に？」

朝倉

〽️ハワイ国ではヨー 時間がたより お前一人が わしゃたより

〽️おれとお前はヨー ハレマウマウの 燃える火よりも まだあついで

浦田「そこにあのなにか… 山の名前なんですか？それはハレマウマウ？」

朝倉「ハレマウマウちゅうのは火山ですよ。火山の燃えよるところですよ。ふたりが仲よーやってゆくところですね。仲よく」

浦田「それから？」

朝倉

〽横浜出るときゃヨー 涙で出たが 今ぢや子もある孫もある  
ハアーついて来いついて来い  
〽朝も早よからヨー 弁当箱肩に ホレホレかよいも ままのたね

## 2. 朝倉カツエ婦人とのインタビュー、9/13/82 於浦田スタジオ 朝倉夫人ニースの結婚式のためヒロから出府の折、録音

浦田「朝倉さんよくいらっしやいました」

朝倉「お世話になります」

浦田「この前あのー 1965だと思いますけどねーお宅にお伺いしましたね。ヒロからちょっと離れたところだったですけど何処、なんという所だったですか？」

朝倉「ワイナクです」

浦田「ワイナクね、あそこに、あの、ミシンさげてですね、来ましたよね。あの頃まだ朝倉さんは… ここに書いてありますけど64歳」

朝倉「そうでしたかね」

浦田「行ったのが1965」

朝倉「私はね全然忘れとったんですよ」

浦田「えーあれから何年なりますかね、一寸えーと18年くらいになりますよね、この前ね録音した色々ほれほれ節のことね、それから朝倉さんのことなどね、その外に聞きたいことが沢山あるんでね、聞きたいことをこう書き出したんですよ。ハイーあのー出身地は熊本ですよ」

朝倉「ハイ」

浦田「熊本のどこですか」

朝倉「鹿本郡です。めのたけ村<sup>そん</sup>です」

浦田「どう書くんですか？」

朝倉「米の時と野原の野の字とたけの字」

浦田「たけはあのたけーバンブー？」

朝倉「ノーあれなんですか阿蘇が嶽とかー」

浦田「ハイハイハイわかります」

朝倉「米ー野ー嶽<sup>そん</sup>村、岩原<sup>いわぼる</sup>」

浦田「岩はあの岩ですか」

朝倉「ハイー原<sup>はら</sup>」

浦田「熊本では原のことをバルというんですよ」

朝倉「そうですね」

浦田「田原<sup>たばる</sup>でしょう。田原坂<sup>いわぼる</sup>って岩原、そうですね、山鹿から近いんですか？」

朝倉「イエ、近いんです、晩にでもお湯に行かれます」

浦田「はあそうですね、歩いてですか」

朝倉「いえー、あかりがさっとみえますから」

浦田「ほんとそんなに近いんですか」

朝倉「はい近いです」

浦田「僕のおふくろのさとがですね、やっぱり山家のそばの<sup>ミタケソソ</sup>三嶽村です。いや  
三玉村<sup>みたまむら</sup>です。親父の方が三嶽村ハイー、近いんですよ山鹿にね、今は  
山鹿町になっていますよね。

朝倉「イエーイエー」

浦田「それでねえ今もやっぱり僕が1965に行きましたね、あのハウスにおられる  
るんですか？」

朝倉「ハイハイ、もう何処にも行きません」

浦田「ハア、そうですね、あれは昔のやっぱりプランテーションのキャンプだっ  
たんですか？」

朝倉「はい、ずっとみんなキャンプですよ」

浦田「そのまま残ってるんですか？」

朝倉「あれを昔は毎月払いよったね、後からうったからね、みんな買いました」

浦田「ほう自分達で買ったわけですか？」

朝倉「ハイ自分たちで買いました、みな」

浦田「建物の形ですね、それはそのままなんですか？」

朝倉「いや、そのままです」

浦田「そのままですね？」

朝倉「ハイそのままです」

浦田「で一途中で古くなったからマタ建て替えたということはないんですか？」

朝倉「沢山建て替えておられます」

浦田「建てかえたのもある」

朝倉「ハイたくさん建て替えておられます」

浦田「朝倉さんの家は建て替えられたんですか」

朝倉「いや前のままです。前のままです」

浦田「アーそうですか、何年そこにお住まいなんですか？」

朝倉「まあワイナクに62年おりますから」

浦田「そのハウスに？」

朝倉「イヤ少し上だったがね」

浦田「ハアー、同じキャンプだけれども」

朝倉「今度買う段になってからあっちはやかましいから中の方に買いました。  
今の所に買いました」

浦田「ずーっとこの一同じ様な家が建っていましたね」

朝倉「イエー、同じ家です」

浦田「それの上の方でなくて今度は下の方にかわられたんですね」

朝倉「いえ、中ならごみがせんでしょう」

浦田「はいはい」

朝倉「だからどうせ買うなら中の方を買いました」



浦田「ハイハイ中の方を買われたわけなんですかアーそうですか。それからですね、あのーこの前ホレホレ節のことを聞いてですね、草の枯れ葉をむしり取ったとを胸に入れるとこう云われたですよ。ところが僕は胸にこう入れるんかと、こうまあ解釈したわけなんです。おかしいなあ、とこう思ったんです。ところがそういうわけでなくてなんですか」

朝倉「そのあのみぞー」

浦田「えーみぞー」

朝倉「あれをむねゆうんですね」

浦田「みぞの中に入れられるんですね」

朝倉「あれをむしってあそこえこうつめて行くんですよ」

浦田「それは僕が思うのには、ヒロの近辺だからそれが出来たんじゃないですか、雨が多いしあのハナワイで水をやる必要がないから」

朝倉「イエー、ハナワイなんか全然ないんです」

浦田「ハナワイなんか全然ないんでしょう。あそこは溝ちゅうのは外の島なんかだとあそこに水がずーっと入ってゆくんでしょう。あの溝はー」

朝倉「ハイ」

浦田「だからあそこに枯れ葉を入れると」

朝倉「邪魔になる」

浦田「邪魔になってつまってしまいますよね。水が流れないですよ」

朝倉「イエー」

浦田「その土地土地によって違うんですね」

朝倉「イエー違いますよ」

浦田「そのとった枯れ葉を… まあ大抵のところだと、あのキビの立っている根元の方においたんですね、それがほんとうですよ」

朝倉「イヤイヤー」

浦田「分かりました、それからあの朝鐘がなるのと一緒に仕事に行かれるとこう云っておられましたね」

朝倉「ハイ」

浦田「この前のインタビューでその鐘というのはどのような鐘なんですか？お寺の鐘みたいなものですか、それとも、どのような鐘なんですか…」

朝倉「鐘々ーなんでも」

浦田「大きさはどれ位ですか？」

朝倉「私もそばに行ってみたんからね。又カンカンカン鳴るでしょう。そしてらもう支度してあのかけとりますよ、べんとうをかるて、そして鐘が鳴ったらすぐ出てステブルでみなよります」

浦田「ステブル？」

朝倉「ステブルが鐘がなる所、オフィスです」

浦田「オフィスそうですか」

朝倉「ハイハイそれからもう八方に分かれて、組が違うでしょう？あっちに行きます」

浦田「まあ昔の人がね作った唄でーカラスが鳴くよりヨー、寺の鐘よりも、朝の出鐘がなおつらいついていうですがね、ずいぶんつらかったでしょう、朝6時ですか？」

朝倉「ハイ朝6時には鐘がしゃっとなります」

浦田「それじゃもう起きるのは、5時半5時」

朝倉「いや5時前です」

浦田「いや5時前ですよね」

朝倉「少し前起きんと子供がおったりしたんではね」

浦田「そして弁当作らなくちゃね」

朝倉「ハイ、弁当もみな作って、そして持っていかにかいけんからね」

浦田「ハアーそうですか、それであのー、これはですね。あのー僕のしたくしていたあの川添樫風さんですよ、ハワイタイムスに仕事しておられた、その方があのー1966にカワイ島の内藤佐市さんという方がね、インタビューした時の記事がね、のっていたんですよ。ハワイタイムスに、それに依ると、これは男のあの服装なんですけどね、なんですか、ホレ

ホレをやる時にね、丈夫な布でアヒナという丈夫な布で上衣とズボンを作り、下着にはメリケン粉の空き袋が用いられたそうですと、この外に手甲と首にまくきれを用いたということですが、これはどうしてかという、あのキビの葉のとげがね、背中にまでは入って来るんだ大変だったそうですよね。女の方はどういう服装をしていたんですか？」

朝倉「女は一緋ね、緋でシャツを作ってインディアンヘッドでね」

浦田「インディアンヘッド、これは僕も初めて聞くんですけど」

朝倉「インディアンヘッドの青いのでね」

浦田「青いってブルーですか？」

朝倉「はい、ブルー」

浦田「ブルーカラーね」

朝倉「ハイあれでこう袴に一」

浦田「ぢやあそれはすごくあの強いんですよね」

朝倉「ハイ強いんですよ。そしてしたはけはん（脚絆）着て」

浦田「けはん手甲けはん」

朝倉「けはんに手おい」

浦田「ておいハイハイ」

朝倉「そして足袋ね」

浦田「足袋は一もうそーですね。あの、朝倉さんが日本から来られたのはいつ  
なんですか？」

朝倉「1920です」

浦田「1920、呼び寄せですか？」

朝倉「ハイ」

浦田「呼び寄せ？」

朝倉「ハイ」

浦田「もうそのころになるとだいぶんあのシンガーミシンなんか持っている人も  
沢山おったでしょうね」

朝倉「いえ、もうみんなたいがい持っておられました」

浦田「ハアで、その足袋は自分たちで作るんですか」

朝倉「イエー自分たちで縫うてね、そして底をうって強いから」

浦田「何？その底をうって、どうするんですか？」

朝倉「車のタイヤ、あれをはいでね、あのうすい所をうってあの一底にあの一」

浦田「下は… ゴムなんですか… それぢゃー」

朝倉「ゴムぢゃないですよ、タイヤのあつい所があるんですよ」

浦田「あー」

朝倉「あれをうちよったんですよ、ずーっと」

浦田「中ぢゃないかな？」

朝倉「さあどこかね、うちのお父さんがしよったんですよ。そしてあのなんの米バイキの中のうすいでしょう。あれをさらしてこう首にこうするんですよ。頭からこうかぶって、そしてパパレかぶってね」

浦田「パパレもかぶって、いわゆる帽子よね、パパレっていうのは帽子よね」

朝倉「ハイ、帽子をかぶってそして、ゆきよりました」

浦田「ハー、そのパパレというのはこのつばのひろいの」

朝倉「イエー、広いやつです」

浦田「それでないとあの日がカンカン照るからやり切れないですよ。あーそうですか、それであの今云ったソーイングマシンですよ。シンガーソーイングマシンですか？」

朝倉「シンガーもあるホワイトもある」

浦田「ホワイト、そうゆうもの一両方あったんですか」

朝倉「わたしはホワイト買うとったんですよ」

浦田「あーそうですか。そんなのどうやって買うんですか。別にCash払うわけでないでしょ？」

朝倉「まあ3円掛けで買う人もある。5円掛けでね」

浦田「はーやっぱり月賦でね」

朝倉「いえーいっぺんに買う人もあるんぢゃがね」

浦田「大体いくら位するものなんですか？百ドル位？前後でしょうね？」

朝倉「それ位だったと思いますがね。もう昔のことだから」

浦田「ハアー、そうですか。あのね、ホレホレは朝倉さんが1920年に来てすぐに行ったときにはもうやっておられたたんでしょう。あのその頃まだあったんでしょう？」

朝倉「いえー、もう先の人たちがボツボツうたいよられました」

浦田「no,no,僕がいうのはホレホレの仕事ですよ」

朝倉「イエー、ずっとみなやりよられましたから」

浦田「それでもあれでしょう。後になってキビの葉を焼く様になったでしょうが」

朝倉「イエイエ」

浦田「あれいつ頃か御存じないですか」

朝倉「さあ何年頃かね。大分ホレホレにも行きましたから」

浦田「そうしたらいつ頃ですかね」

朝倉「後からはずーっと焼いて」

浦田「そうですよ。焼いて」

朝倉「焼いて切りよったんですよ」

浦田「焼くからホレホレは必要ないですよ。ご存知ないですか？」

朝倉「何年かはよくおぼえないね」

浦田「でも大体ホレホレはどれ位やられたんですか？ 1920年から来て10年もやりましたか？」

朝倉「やったかねーわたしもようおぼえん」

浦田「おぼえてない」

朝倉「イエー」

浦田「始められた頃、いくつくらいだったんですか」

朝倉「18でした」

浦田「ハアー、18。番茶も出花ですよ。ハアー、そうですか。アーそれでホレホレはどう思いますか？あのほとんど女の人がやると僕は思いますが」

朝倉「イヤー、大がい女が多いねー」

浦田「そうですね。力仕事じゃないから」

朝倉「男の人たちはハッピーコウとかボーンミルとかね、あんとなのが多いでしょう」

浦田「一寸力仕事ですね」

朝倉「イエー力仕事だから」

浦田「力仕事なんか、ハッピーコウなんか重いキビをかかえるとホレホレなんかもでないですよね」

朝倉「あのーパレー（？）の際はね、まあ女でも男がのせてやったらイチわづつかたげてね、やりよたんですが、主に男ですよ」

浦田「まあ女でしょう」

朝倉「いや、あのハッピーコウ」

浦田「はあ、ハッピーコウは、でもホレホレは？」

朝倉「大がいおなごでした」

浦田「おんなですよ。ホウーそれでやっぱりホレホレやりながらあのホレホレ節、殆ど歌ってしまいたか？それとも或るときは歌はない、大抵誰かが歌っていた？」

朝倉「いや、好きなもんは歌うね。」

浦田「歌好きな人は」

朝倉「好かん人達はまあ黙っている」

浦田「ハイ黙っている」

朝倉「ついて来よられたんですよ」

浦田「パーティなんかあってその時にもやっぱりホレホレなんか歌ってましたか？」

朝倉「あん時分にはホレホレ節はえーっときかなかったね」

浦田「ハア、その土地の？例えば朝倉さんなんかは熊本出身だから熊本のおてもやんとか」

朝倉「あんとやなんじゃを歌うですね。ホレホレ節は滅多に聞かなかったです

よ」

浦田「あーそうですか。でホレホレのね、でいろんな歌がありますよね。もう一寸あんまりその歌の文句がね、一寸まあここでいうゲサクですよね」

朝倉「ゲサクですよねほんとイエー」

浦田「ゲサク、まあ下品な歌が多いから、そういうことでもみんなの前の宴会なんかではそういうことで歌はない。あんまりはやらなかったんじゃないでしょうか？」

朝倉「イエーサね、まあ飲む人は冗談半分に歌はれる人もあるんですがね」

浦田「僕も困ったんですよ。あのもっとひどい歌あるんじゃないですかちゅうと、いやいやもうこの辺でかんべんして下さいって中々出してくれないですよ、そういう歌をね」

朝倉「飲んだら出るかもしれんが中々」

浦田「そういう歌が案外多かったんでしょう？パケさんとモイモイすりゃ、アカヒカラね」

朝倉「あんとなものやはりよりましたよね」

浦田「特になんですかあの僕が1965に行った時にね、ハワイタイムスのあのヒロの支局長のね、村上さんね、歌って下さいっていったら、2、3曲やってね、これだけでやめとこ、後は一恥になるけの、なんていっちゃって、そういう歌はれんような歌があったわけですよ。歌の文句にね…それからそのホレホレ18歳の時にね、始められた時いくら給料貰っておったんですか？」

朝倉「私が来た時ですか？あの時分は高かったですよ。一日が3円50銭貰いよりました」

浦田「エー3円50銭、まああれからだいぶなりますよね。35銭ということはおもうずっと前よね」

朝倉「前のことです」

浦田「パケさんとモイモイすりゃいう時代は」

朝倉「ハワイハワイって喜んで来る筈です。3円50銭じゃ貯めにゃいけんて思

うたんですよ」

浦田「ハイハイ、それはずーっとは続かなかったんですか？」

朝倉「ノー、長うは続かんでした」

浦田「それで安くなったんですか？」

朝倉「バイバイずーっと安くなりました」

浦田「いくら位になったんですか？」

朝倉「一番安いときが男が1円でおなごが70銭になった頃もありました」

浦田「そんなに違うんですか」

朝倉「イエーあーゆう頃もありました」

浦田「それは何かわけがあるんでしょう？」

朝倉「わけはまあ詳しく知りませんが、ね、あーいうこともありました」

浦田「ほうー随分違うんですね。3円50銭からオンナは75銭」

朝倉「長年の間よね」

浦田「ハイハイへー僕はそのホレホレ節のメロディーね、いわゆるその歌のね、  
節ねあれはね、広島県の民謡から来てると思うんですけども、朝倉さん  
はどう思いますか？」

朝倉「私もここへ来てまあみんなのまねしてなるたんだからね」

浦田「分かりませんね」

朝倉「イヤーどこの？まあハワイの歌って思うとりよりましたよ」

浦田「ハアで朝倉さんの働いていたワイナクのプランテーションではね、広  
島県人の方は多かったですか？」

朝倉「イヤーおられました」

浦田「でもそんなに外の県よりも多いということはなかったんですか」

朝倉「まあ熊本県沖縄県が多かったんですよ」

浦田「アーそうですか、ハイハイあのこりゃ藤間美佐夫人ちゅう方がご存知な  
んですか？」

朝倉「ノー、私知りませんよ」

浦田「あーそうですか」



朝倉「新聞みてわかったんですよ」

浦田「この方ね、ヒロに大久保さんが居られるでしょう？あのヒロタイムスの」

朝倉「おー大久保さん、ヒロタイムスの一ボーシね」

浦田「あの方がいわれるのに、此の方は新潟県出身なんですけどね、ホレホレ節がすごく上手なんです。てなことね、僕は偶然此の方のホレホレ節を録音してテープ持っているんですよ。そのホレホレ節の藤間の歌った節とね、それから朝倉さんの歌ったホレホレ節の節とね、ほとんど同じなんです」

朝倉「そうですか」

浦田「だから僕はね、同じようにして行き来があったんかと思ったんですよ」

朝倉「ノー、初めてですよ」

浦田「知らないですか」

朝倉「知らないですよ」

浦田「面白いですね。僕は同じ此の方もあの岩崎キャンプに居られた方なんですよね。だからあのへんのプランテーションに」

朝倉「めったにあちに行くことはないんですからね」

浦田「ハアーそうですか」

朝倉「今ならもう車が多いからあちこちするでしょう。その時分には車はないしね」

浦田「それからあのーホレホレ節にはハワイの土人の言葉がね、たくさんはっていますよね。ハワイアのね、だから随分こうハワイアとの密接な関係があったと思うんですよ。日常生活にはね、そういうことなかったんですか。1920年頃になるともう…」

朝倉「いえー、無かったねえ」

浦田「やっぱり官約移民か又は漂流時代にね来た人達はね、昔の人はもう日本人は殆どおらないんだから、いわゆるハワイアンしか居らないんだからその人たちと話すより他には無いわけですよ。そういうことからいわゆるハワイの言葉を沢山習ったわけなんですよね」

朝倉「随分苦労されたよね」

浦田「イエイエ、西を向いても東向いても日本人余り居らんからね。この前録音したの、さっきお聞きになりましたね。その外にあのーホレホレ節文句で一寸ゲサクな歌でいいですよ。あのーそうゆう歌、歌ってくれないですよ、実際のところ無いですか」

朝倉「中々ね、うとうても」

浦田「ご存知ないですか。歌はなくていいですから、そうゆう文句、ご存知ないですか。分かりませんか？それともさっき歌ったね、なにか6つ位ありましたよね、その外に何か文句ご存知ないですか？」

朝倉「そうよね、まあ、

～ 雨は降る降る 洗濯物はぬれる 背なの子は泣く めしゃこげる

熊本の言葉ですよ。めしゃこげるだからね、あんなものもありますよね」

浦田「それは、もう思い思いに時分が思ったあれを歌の文句にして作るわけですか？」

朝倉「歌の文句にして自分で作るわけですよ」

浦田「ごく簡単ですからね。短いあれですから」

朝倉「まあ誰でもできますよね」

浦田「それから外にないですか。おぼえてないですか？」

朝倉「中々ひょくつとはね」

浦田「ひょくつとは出ないですか。あのーまー前は1920朝倉さんがこられる前は、この男と女のね、数が非常にこう平均されていなかったわけなんですよね、男10人に女が1人」

朝倉「少なかったから」

浦田「だからいろいろ男女関係があったんですよ、いろいろ、悪い関係があったんですよ」

朝倉「あんな話もずいぶんあったんですが、私は年取らん方だかた黙って聞いて

ていたんですよ」

浦田「朝倉さんなんかはそういうあれ経験ないですか？そういうことを聞いた」

朝倉「そういうことはないんですよ」

浦田「あらーこれは大分」

朝倉「これはまあ、無いことも無いけどね、イエー」

朝倉「男がジャーレスして女をたたいたり、女が逃げたりどうしたりした話がありますよね、でも」

浦田「何がひどいの、外の人をのワイフをとったりしたとかね」

朝倉「あれも、たくさんありましたそうなあ」

浦田「それはお聞きになったでしょう？」

朝倉「もう、ずーっと聞きよりました」

浦田「はあ、それから売ったとかね」

朝倉「そう」

浦田「そういうことあったんでしょうね」

朝倉「そして又来て年が違うからもう若いのと逃げたとかね。あんなこともありよりました」

浦田「ハアー、それであの、ホレホレですよ。キビがどれ位大きくなって最初やるんですか？」

朝倉「そうよね、まあ、私くらいの高さになったらこうホウハナをせるよね、ホウハナいうたら草をむしりとる」

浦田「大体まあ、人間の高さくらいになったら」

朝倉「草をホウでむしるんですよ」

浦田「いわゆる砂糖きびの。根元にある草をとる」

朝倉「まん中の方に引きずり込むですよ」

浦田「ハイハイハイ」

朝倉「そしてまだ大きゅうなってから、今度」

浦田「大きくなるってどれ位大きくなるんですか」

朝倉「はあー、もうすぐ太りますから」

浦田「どれ位して、人間の高さ位になるんですか？」

朝倉「さあね、どれ位、すぐですよ」

浦田「6ヶ月？半年？」

朝倉「早いですよ。まあ数えはせんがね、早いですよ。太るのが、まあ4、5ヶ月したらだいぶ太りますよ。私などがプラウ (plow?)にゆくのに、早い早いと言っていきますよ」

浦田「そしてあれですか。草をむしり取る、あのホウで取るでしょう。それはいつでもやるんでしょうね。あのー、すぐ草がしげえるから」

朝倉「やっぱりこっちがすんだらあっちという様に」

浦田「なるほど、あっちいたりこっちいたりそうそう」

朝倉「ちゃんとじゅんじゅんにルナがおりますから」

浦田「ハイハイハイ、そしてエー実際にそれだから枯れ葉が出来るのはだいぶしてからでしょうね」

朝倉「イエ、大分してからです」

浦田「成長してその間から枯れ葉がこう垂れるからね」

朝倉「もう先が見えん様に枯れ葉がこうしますよ、あれをこう取ってはこう、むねにこう、するんですよ」

浦田「だからなんですか、岩崎さんというてホームのプランテーションで仕事した人が居るんですがね、その人をインタビューした時にあのー雨が降ったときがやり安いつて」

朝倉「そりゃやわいでしょう」

浦田「そして垂れるでしょう。あの」

朝倉「日が照ったら、パサパサとするでしょうが」

浦田「ハイハイ」

朝倉「あれで」

浦田「そんな事云ってました」

朝倉「イエーあれでいたしいですよ」

浦田「分かります、だからそうかと云って雨の降る時だけちゅうわけじゃないんでしょう。照る日もやるんでしょう」

朝倉「イエー照る日もなんする日もやらにゃいけんでしょう。ずーっと続きでやるから」

浦田「そうよね、そういうことはいえますよね。雨が降ったときがこのむしりとるのにとてもみやすい」

朝倉「みやすい、非常に、ハイハイ分かりました。つらかったんでしょうね。始めの頃は？」

朝倉「まあ歌の通りですよ」

浦田「ねえー？」

朝倉「そのままですよ。ハイ」

浦田「やっぱりあの朝倉さんなんかある程度ハワイでもうけたらジャパンに帰ろうっという気持ちはあったんですか」

朝倉「あったところじゃないですよ。お父さんお母さんが居られたからね」

浦田「どこに、ここに？ジャパンに？」

朝倉「いや、ここですよ。ワイナクに。ほいで私等が来てからお父さんお母さん等を帰す算用じゃったんですよ」

浦田「一生懸命仕事してみんな親子一緒に」

朝倉「お父さんお母さんなどはこちらでずーっとなんして2人共こっちで亡くなられよりました。それでも私はどこへも行かんで日本に帰ってももうどうすることも出来んでしょう。だからもうここへずーっとおります」

浦田「あーそうですか。そういう気持ちはいつもあったわけなんですか？」

朝倉「ハイ」

浦田「なんとかして早くジャパンへ帰ろうって」

朝倉「あれが忘れられんですよ」

浦田「ホラーそのままそれでずーっとハワイに居ついたわけよね」

朝倉「ハイ、ずーっと居りました。日本に親も兄弟もみんな居りましたからね。私もこっちに一人でしょう。だからいつも手紙はやっぱりとったりする

がね、やっぱ忘れられんですよ」

浦田「ハイハイねー、どうも有難うございました。色々これで大分助かりました」

朝倉「ハア、すみません」

終り

### 3. <sup>トウマミサ</sup>藤間美佐 (83才) 新潟県出身

#### ヒロ KPUA 放送局アナウンサー佐藤シノブ婦人インタビュー

佐藤「今晚は、夜分おそくお邪魔して、藤間さんとおっしゃいますんですか？」

藤間「ハイ」

佐藤「お年はおいくつでございましょうか。失礼でございますが」

藤間「まんまる83になります」

佐藤「左様でございますか。まだお若くていらっしゃいますが、ではまたお伺いします。ホレホレ節を唄っていただくお話でございましたんですが、どうぞよろしく願いいたします」

藤間「私にできるかわかりませんが」

佐藤「あの日本からこちらに来られまして何年におなりになりますでしょうか？」

藤間「来月で67年になります」

佐藤「日本のおくにはどちらでございましてか？」

藤間「新潟です」

佐藤「左様でございますか？寒いところからまたハワイのような暖かい所へ来られましてさぞかしいろいろとご苦労な事がございましたでしょう。もしそのお話を失礼でございませでしたらお話をお伺いしたいと思います」

藤間「私条約で来ましたからね」

佐藤「それが何年でございました？」

藤間「明治32年（1899）年の3月21日にオアフへ上りました」

佐藤「左様でございますか」

藤間「その時にね、700人ばかりきました」

佐藤「それは新潟の方が700人ですか」

藤間「イエイエ、新潟県人ばかりそれ等があっちこっち20人30人ずつずーっと分かれたんです。条約人ですから、どこでも行けゆうに行ったんです」

佐藤「そしてこちらへ来られましてホレホレ節を唄いながらお働きになったんでございますね」

藤間「えーそうです」

佐藤「こちらへ来られて一番つらかったお話とゆうのは何でしょうか？」

藤間「とても話になりませんですね。三枚作りにね、ふたとこ（2家族？）入ったんです。三枚作りですからね。ここにね、小さいテーブルを置いたんですよ。ケチンがこのへんにあってね。朝はごはんたきに早う起きてそしてもう仕事に出ますよね。ホレホレ節にも朝は5時からとゆう唄がありますが、5時からでないと間にあわないんです。朝出るのは自分のタイムですから、行ったり来たりゆうのはね、自分のタイムですから、それっだから5時でも7時でも歩いて行って歩いて帰らなくてはなりません」

佐藤「それでは朝は随分早くから起きられますね」

藤間「夜から起きなきゃいけません。夜から弁当を作ったり5時にはおべんとうをもって合羽持もって出ていかにやなりません」

佐藤「それで何時までお仕事されていますか？」

藤間「4時までです。けれども歩いて来なくちゃいけません」

佐藤「5里（5哩）、7里（7哩）ありますと随分歩く様ですね」

藤間「汽車もなければ馬もなければ60年前の事ですから」

佐藤「何年程そうゆう風なことを」

藤間「2年程つとめました。条約がきれいでしたから。条約人は今はおりませんがみんな難儀しております。肉は1ポンド30弗でした。それが食べるこ

とができません。1日中働いて35仙ですから、男は1ヶ月分の給料から2弗50仙ひかれました。それから食べる物でもね、お醤油1本に水2本位入れて塩入れてたいて置くんですよ。ごちそう食べられませんです。私たちの前の人達は7弗50仙でした。男は12弗50仙、私よく覚えています」

佐藤「それじゃ67年の昔を思いながら今日はホレホレ節をこれから歌っていただきとうございます。どうぞよろしく願いいたします。此のホレホレ節よりも此のお話をお伺いしておりました、せつないような気持ちになってせつな節と申せられた方がいい様な」

藤間「せつな節です」

佐藤「はあ、そうですか、それでは藤間様にせつな節をお願いいたします」

藤間「それじゃね、うたってみましょうか。

〽️好きでホレホレするのじゃないが これも身のため国のため  
あーそうでガンショ、その気でやつなされ  
〽️行こかメリケンヨー帰ろか日本 ここが思案のハワイ国  
あーそうでガンショ

佐藤「どうもありがとうございました。雨が降っている中でみなさんがそうゆう風に唄っていらっしゃったせつないお気持ちがよく伝わるような気がいたします。どうぞいついつまでもお元気で。ありがとうございました。83才になられました藤間様にお願いいたしました」

藤間

〽️条約切れてもヨー 帰らぬ人は いづれハワイのキビのこえ  
ハアーその気でやんなれ  
〽️条約切れたらよー キナウに乗りて 行こやカワイのハナペペに  
はあーそうでガンショー その気でヤンナレー



佐藤「どうもありがとうございました。今、途中で唄の中でハナペペとかいう名がでてきましたが」

藤間「そうゆう所があるんですよ。カワイに。誰が作ったんでしょうね、こりゃカワイのハナペペですよ」

佐藤「何に乗ってキナウとかおっしゃいましたが、それはどうゆう意味なのですか？」

藤間「島通いのキナウという船の名前ですよ」

佐藤「あー左様でございますか、今のホレホレ節の中で色々と文句がでましたが、これは一体どちらのくにの言葉なり唄がまじったと思はれますか？」

藤間「そうですね、私はあの頃はわかりませんが、今考えますのにね、多分中国から出たんだと思います。広島弁が多かったですからね、広島だと思います」

佐藤「67年前に来られました時に広島の人たちがいらっしやっていたわけですね」

藤間「まだあの頃、熊本の人たちは少なかったですよ。中国の人が多かったですよ」

佐藤「中国の方が先でそれからおばあ様たちがこられましたんですか」

藤間「九州熊本の人たちがそれから来ました」

佐藤「ホレホレ節の文句の中にもヤンナハレーという文句が出ておりましたが、これもやはり広島という言葉でしょうね」

藤間「まあ誰かつけたものでしょうね。ヤンナレーやはりこれも広島ですね。これもヤンナサレでなくてヤンナレーです」

佐藤「ハア、そうですか」

藤間「はやしです」

佐藤「囃子詞でね」

藤間「お次に唄いますよね。そうするとみんなついて来るんです。そうでガン

ショーその気でヤンナレー、みんなはやしです。はやし入れないと唄う方が出ませんから、唄う方は余り居らんからはやしの方は大勢いるからみんなあワーッといますよ。ルナでもにこにこ笑っていますよ」

佐藤「藤間さんはだいたい何十人くらいと一緒にお仕事しておられましたか？」

藤間「あの頃は女は60人から80人位おりました」

佐藤「80人位？」

藤間「ハイ、みんな条約人です。男は居らないんです。女ばかりです。仕事が楽ですからね。男はホウハナとか。ホレホレはみんな女でした」

佐藤「アハー、そうですか。どうも色々貴重なお話を長時間にわたりまして有難うございました。藤間様でございました」

## <文 献>

川添樫風, 1960, 『移民樹の花開く』 移民樹の花開く刊行会.

川添樫風, 1968, 『移民百年の年輪』 移民百年の年輪刊行会.

木原隆吉, 1935, 『ハワイ日本人史』 文成社.

村崎並太郎, 1920, 『最新布哇案内』, 布哇案内社.

タサカ、Y・ジャック, 1985, 『ホレホレ・ソング』 日本地域社会研究所.

相賀安太郎, 1953, 『50年間のハワイ回顧』, 50年間のハワイ回顧刊行會. pp.31-32.

浦田実, 1981, 『楽譜になったハワイ民謡ホレホレ節 (その2)』, Kokiku 11月号, p.26.

# Field notes by Harry Urata: Katsue Asakura and Misa Toma talk about “Hole-hole bushi”

NAKAHARA, Yukari

“Hole-hole bushi” is a folk song sung by nineteenth-century *issei* (first-generation Japanese immigrants) while at work in the sugarcane fields in Hawai‘i. The song was not taken up by the *nisei* (second generation) and was largely forgotten after World War II. However, Harry Urata, a *kibei nisei* (a *nisei* educated in Japan), recorded performances by *issei* and unified a tremendous range of idiosyncrasy in the melody, thereby obtaining copyright to the song in 1981. Since then, the song has spread, and musicians have performed it in both Hawai‘i and Japan.

This paper concerns Urata’s field notes, made when he visited the *issei* and recorded “Hole-hole bushi.” While recording the performers, Urata also interviewed them concerning their labor in the fields and about their lives, and later transcribed the contents of his tapes. This paper focuses especially on interviews with Katsue Asakura and Misa Toma, which Urata considered when unifying the various melodies of the song.